

看護学科学生と看護職の未来と持続可能性を考える座談会

2021年5月27日(木)

“目的”

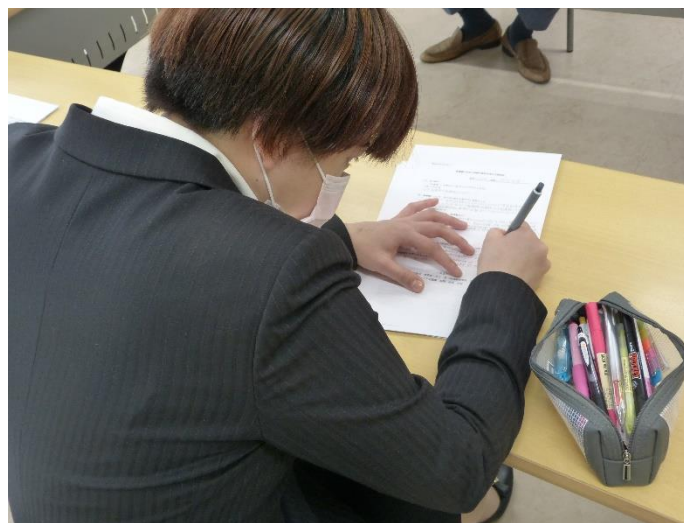
Nursing Now キャンペーン※を通じ、看護職を目指す学生と、キャリアデザインとSDGsを担当する地域経営学科の教員と対話し、学生が自分自身のキャリアと、地域や世界の持続可能性について考える。

※看護職が持つ可能性を最大限に発揮し、人々の健康向上に貢献するために行動する世界的なキャンペーン。

参加者：地域経営学科 講師 井上丹先生

看護学科 学生 佐藤拓海(4年生)・大村扇慶(4年生)・野口優花(4年生)

程佳萌(1年生)留学生



写真左：座談会の様子

写真右：シート記入作業

① 自己紹介（出身地、いま考えているキャリアデザインなど）

【佐藤拓海】埼玉生まれ、青森県八戸市育ちです。キャリアデザインに関しては、あまり考えたことはありませんでした。今後、現場に出て、看護の実際を経験する中で、目標やキャリアアップについて考えていきたいです。



【野口優花】出身は北海道北斗市です。キャリアデザインに関しては、実習先で行った病院に影響を受けて、将来的には師長になり、誰もが働きやすく明るい職場を作りたいと考えています。



【大村扇慶】出身は神奈川県横浜市です。小児看護専門看護師になりたいと考えています。また、大学病院の高度な医療提供の場で、色々な疾患に携わりたいです。そして、知識をたくさん身につけて多くの小児の命を救い元気になってもらい、笑顔になってほしいです。



【程佳萌】中国の天津からまいりました。日本に来る前に、看護師として中国の病院で一年間働いていました。私が、今考えているキャリアデザインは、まず日本の看護師の資格を取得して、それから大学院に進学したいと考えています。将来は母性看護の専門看護師になりたいです。また、機会があればもっといろいろな国で看護学を学びたいとも思っています。



② 看護職について、世の中の変化を受けていること

【大村扇慶】コロナ禍で、ワクチン接種や病床数のひっばくしたICUなどで潜在看護師がたくさん起用されている。定年などで看護職から離れていた看護師にも活躍する場所があり、もっと色々な形、現場で活躍できるのではないかと思います。



【佐藤拓海】コロナが流行る今の世界で、看護職への差別が顕著になったと感じる。特に都会では、保育園や学校への登園・登校が拒否されていることや、それに似たような発言を受けるとTVで観た。その差別的な行動や発言をする人が、病気や怪我をしたら看護を提供するのは看護師なのに、なぜ差別ととれるような事をするのかと思います。

【野口優花】コロナの影響もあり、看護師の必要性は増したが、負担が大きくなっている。ロボットなど、科学技術はどんどん発展しているが、命に関わることは、人の手、看護の手は何にも代えられない、看護の必要性は一生変わらず続いていくと思います。

【程佳萌】看護師は医療システムにおいて重要な役割を担っていると思います。今コロナウイルスが流行っていますので、看護師の重要性をさらに感じました。中国では「三分の治療、七分のケア」という言葉がある。これは看護の大切さを表しています。世の中が変化しても、「三分の治療、七分のケア」は変わらないです。コロナウイルスが発生した時、看護のリスクが高くなります。自分の安全を守りながら、より多くの患者さんをケアしていくのは大事だと思います。

③ 看護職の多様性について（ジェンダー・グローバル・価値観など）“SDGs.5”

【佐藤拓海】男性が圧倒的に少ないが、だからと言って増えてほしいとも思わない。それぞれのやりたいことや、憧れていることがあると思うので、そちらの仕事に優先して就いてほしい。グローバルに関しては、2021年はよりグローバルとなっているはずだったと思うので、外国の文化や風習をいかに医療現場で取り入れて、外国の方も日本でも安心して治療や看護を受けられるようにという事を考えていかなければならないのではないかと思います。



【野口優花】私は卒業論文の研究で外国人患者と日本の看護師の関わり方、価値観の違いや言葉の壁で、患者に治療の内容が伝わらなかつたり、コミュニケーションを取ることが難しかったりすることがある事を知りました。そのため、外国の方の価値観や言語を学んだ上で、看護をしていく必要があると思っています。

【大村扇慶】数年前と比べて、男性看護師の人数が増えてきているように感じました。女性と男性の壁がなくなり、女性の職業という考えが少しずつ壊されていて、男性の活躍しやすい、また男性だからこそ活躍できることも増えているように感じました。また、国際化が進む世の中で、外国人患者が増えてきている中で、外国出身看護師も増えていると考えられます。言語や文化の理解、また育児支援の面についてもすごく大事な存在だと思います。

【程佳萌】いま日本で生活している外国人が増えています。それに伴って、受診する外国人の比率も年々高くなっています。それで、日本でも外国人に対応できる看護師が数多く要求されるようになりました。私は人々が持つ多様性、個人が求めるニーズに対応できるような看護師になりたいです。グローバル化が進む中、いろいろな国の患者さんとコミュニケーションを取れるように、たくさんの国の言葉を話せるようにになりたいです。

④ 看護職のこれからの働き方について（やりがい・待遇・持続性など）“SDGs.8”

【佐藤拓海】仕事量がとても多く、女性が多い職場で、結婚や妊娠等のライフイベントで離職・休職が他の業界よりも多い。人数が減ると、その分負担が他の人に回ってしまう。一人一人の質が高くても根本的な解決にはならない。まずは、採用人数を増やす、休職中の人を一人でも多く復帰できる環境制度を作る。働き方の大幅な改革はまず、そのようなことからではないかと思います。

【野口優花】TVで、コロナ病棟で働いている看護師の現状を観て、人々に命の大切さや健康維持・改善に向けて働きかけることで、よりやりがいを感じ、離職を減らすことができるのではないかと思います。現状で、コロナ病棟で働いていると家族や友達にも会えない状況であるので、それを観ていると離職が増えるのではないかと思います。また、実習先の病棟の師長さんの雰囲気づくりの大事さを感じました。やりがいとしては、患者さんからのありがとうの言葉が大きいです。

【大村扇慶】患者や家族の身近な存在になれたり、命を救う手助けをすることができる職業であるため、より良い看護を提供できるようにしたいです。離職率が高いと言われている中で、高齢者社会が進んで看護師は多く求められている。だから、もっと看護師という仕事について知ってもらって、マイナスだけでなくプラスの面についても知ってもらった上で、増えていってほしいです。現場について、よく知ってもらい色々な場所で働けることも知ってもらいたい

です。

【程佳萌】待遇についてお話をしたいと思います。看護師は医師と同等の地位にあり、同等の尊敬と同等の給料を受けるべきだと思います。また、女性と男性は平等の雇用機会と給料に保証されるべきだと思います。



⑤ 看護職として、医療業務の他に地域社会に貢献できることは何か“SDGs.3”

【大村扇慶】 保育園や幼稚園での怪我をした子どもへの対応や、育児や成長・発達に携わる場所での子育て支援や、公民館などでの高齢者に向けての健康に対してできることなど、病院での経験を活かしたアドバイスをできる場などで活躍できると思います。他にも、美容サロンや献血など、病院ではない場所でも看護師が活躍しているため、もっと多くの場所で働けたら良いと思います。

【佐藤拓海】 親戚の軽い健康相談や、病院に行くまでもないけど、少し不安だったりする方に対しての健康相談をおこなったりすることで地域社会へ貢献することができるのではないかと思います。

【程佳萌】 地域の住民に医療知識を普及していきたいと思っています。そうすることで、病気を早期に発見して、早期に治療することができます。

【野口優花】 地域の学校や教育機関へ行き、現在であればコロナに関して、看護師の立場から授業を行ったりすることで、地域の方々との交流も増え、貢献できると思います。



⑥ 看護職を目指す自分自身の決意と、後輩へのメッセージ

【大村扇慶】自分に厳しく、常に成長して色々な壁がある中で、弱い部分から逃げないで、取り組んでいこうと思います。

看護職は、やる業務はとても多いし、生命が誕生する場面や、回復する良い場面だけでなく、死や悪化傾向にあるマイナスな場面にも携わるけれど、小さなことでも患者さんや家族のためになり、笑顔がみられることも多いため、自分のなりたい姿を忘れずに頑張りたいです。また、看護師の不安や家族の不安は直接、患者に伝わるので、患者の疾患に対してのケアだけではなく、家族も含めて身体的・精神的に支えられる看護師という職業をよく知ってもらいたいです。資格として、看護師はとても大きな存在になるため、職業としなくても資格を得て、色々な視点から携わってもらいたいです。

【佐藤拓海】看護師を生業とするなら、患者の望み通りの結果となる看護を提供したいと思います。

専門実習が始まるとストレス過多にも寝不足にもなる、理不尽なことも起こるが、つまずいていられないので、うまく受け流せるようになってほしいです。また、将来的に看護職に就かないとしても資格は持っていて損はないと思うので頑張りたいです。

【野口優花】自分に妥協せずに、一人ひとりの命に向き合える看護師になりたいです。

授業が大変、実習が嫌だ、などの気持ちになることがあると思うが、患者のために頑張ったことは必ず自分を成長させてくれる、そして、患者にも伝わっているのだから、自分に負けずに頑張ってください。

【程佳萌】看護職は人々の生命と生活を支える神聖な職業です。患者ひとりひとりを見守って、癒し、みなさんの健康と喜びのために、がんばりましょう。





座談会の様子



記念写真：左から

大村扇慶さん、野口優花さん、佐藤拓海くん、程佳萌さん、井上丹先生